# 観音菩薩の宗教 ⑬

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

## 聖徳太子と飛鳥時代の観音信仰

これまで観音菩薩の特色を多角的に見てきたが、観音信仰はいかなる時代に日本に受容されたのであろうか。日本における観音信仰を見るにあたり、今回はその最初期の状況を探ってみたい。

日本への仏教伝来の年は、かつては『日本書紀』の記述に基づき欽明天皇十三年すなわち西暦五五二年とされたが、現在では聖徳太子（厩戸皇子）の伝記である『上宮聖徳法王帝説』や元興寺の歴史を記した『元興寺伽藍縁起并流記資材帳』の記述を根拠に西暦五三八年とされるようになった。筆者が著した高校の教科書でも後者を定説として、前者は「五五二年の説もある」と括弧内に補記するに留めている（『高等学校現代倫理』清水書院）。受験生にとってこの年号は「ご参拝」と語呂合わせで覚えられるので、記憶している方も多かろう。

仏教の伝来は当時の日本人にとって大きなインパクトであった。『日本書紀』によれば、欽明天皇の群臣たちは、今まで見たこともない仏像の輝きに驚愕した。それまで日本人は姿の見えない神々を信仰し、造形的に表現することもなかったから、宮中の人々が姿の見える「蕃神」（外国の神）に驚き戸惑ったのは当然であろう。いかにすべきか迷われた欽明天皇は、「西の国から来た佛は顔がきらびやかであり、今まで見たことのないものだ。これを礼拝すべきか否か（西蕃獻佛相貌端嚴。全未曾看。可禮以不）」（『日本書紀』巻第一九「欽明天皇紀」）と廷臣たちにお尋ねになった。それに対し、仏像を礼拝すべしとした蘇我馬子らと、排除すべしとした物部守屋らが議論したが、決着がつかず対立が続いた。この確執は聖徳太子の父である用明天皇の時代まで長引き、とうとう半世紀後に内戦となった。これが丁未の乱（五八七年）で、日本で最初にして唯一ともいってよい宗教戦争である。戦局は蘇我氏側に有利に働き、物部氏は滅ぼされた。その結果、朝廷において大きな勢力となったのは、蘇我氏の血を引く聖徳太子やその叔母の推古天皇らである。これによって日本では仏教政策が推進されることとなった。

救世観音立像。法隆寺・夢殿蔵

文化史から見た場合、仏教伝来から蘇我系の人々が活躍した大化改新までの時代を飛鳥時代という。飛鳥は都の場所である。日本仏教は飛鳥時代に始まり、その礎が築かれた。その中心にあったのが聖徳太子であった。聖徳太子については古代史家の大山誠一氏らが「非実在説」を唱えるなど、その存在を否定する説が一時、巷をにぎわせた（『〈聖徳太子〉の誕生』吉川弘文館）。しかし現在では太子の死後の世界を描かせたとされる天寿国繍帳の調査や（大橋一章『天寿国繍帳の研究』吉川弘文館）、太子の等身で造られたとされる法隆寺釈迦三尊像銘文の解明（東野治之『大和古寺の研究』橘書房）、太子関連の基礎文献の再検討（石井公成『聖徳太子―実像と伝説の間』春秋社）など、イデオロギーを抜きにした真摯な諸研究によって聖徳太子の実在を疑うのは困難になっている。

日本における観音信仰も、飛鳥時代に始まり聖徳太子と深いかかわりを持ちながら根付いていった。まず、そのことを文献の上から見てみよう。

『上宮聖徳法王帝説』などによれば、『法華義疏』『勝鬘経義疏』『維摩経義疏』、すなわち三



経義疏は聖徳太子の著書とされるが、その真撰を疑う声は少なくない。例えば『法華義疏』は、梁の法雲の『法華義記』の焼き直しであるとか、高句麗僧の慧慈が著したとする学説や、『勝鬘経義疏』はそれと酷似する敦煌写本があって、海外から日本にもたらされたに過ぎないとする見解などである。しかし、古くは仏教学者の花山信勝が指摘し（『聖徳太子御製法華義疏の研究』東洋文庫）、近くはコンピューターを駆使した変格漢文の分析（石井公成、前掲書）などにより、これらの著書が同一の日本人による著書であることが明らかになりつつある。それが事実とすれば、飛鳥時代、三経義疏の著者として聖徳太子以外の人物を想定することは難しい。なかでも『法華義疏』は、太子自筆とされる写本が伝存することで、真撰の可能性が最も高い。『法華義疏』は『法華経』「普門品」に対する注釈も含んでおり、観音信仰の面からも重要な意味を持っている。

『法華義疏』第四「観世音品」には、法雲の『法華義記』と重複する部分もあるが、著者独自の解釈も見られる。たとえば慈悲を「悲心抜苦、慈心與楽」とすることや、観音菩薩が救う困難のうち、心の困難を「内悪」とする点などは法雲の記述には見られない（花山前掲章および望月一憲『法華経と聖徳太子』第一書房）。『法華義疏』がいずれの著者によるかはひとまず置くとしても、ここに観音菩薩への理解と尊崇が見られることは確かで、飛鳥時代に観音信仰が始まっていたことの証左となる。

次に仏像から飛鳥時代の観音信仰を見てみよう。聖徳太子が建立したとされる七大寺のうち、太子に最もゆかりの深いのは世界文化遺産の法隆寺であろう。法隆寺は太子が住んだ斑鳩宮（鵤宮）に隣接して建てられ、太子に深いかかわりを持つ伝承や宝物が多い。創建は推古十五年（六〇七）と伝えられ、西院伽藍は世界最古の木造建造物とされる。東院伽藍に属する夢殿は、太子が『法華義疏』を執筆中、夢に金人が現れ教示を受けたとされる伝説に基づいて呼ばれるようになった伽藍で、そこには国宝の救世観音立像が祀られている。この像は日本に自生するクスノキ材の一木造りで、日本で造られたことは明らかである。法隆寺の財産目録のひとつである『東院資材帳』（七六三年）には、「上宮王等身観世音菩薩木造一軀金箔押」とあり、聖徳太子の等身に造られた観音像とされてきた。その背丈は一七八・八センチあり、かなりの長身である。同じく法隆寺の釈迦三尊像の主尊も聖徳太子の似姿に造像されたと伝えられ、その銘文の研究により、疑いを入れがたくなっている（東野、前掲書）。これに対し、救世観音は不明な点も多く、長く秘仏であったことと相俟って、そのモデルの認定には諸説ある。造像年代は、救世観音が止利仏師による北朝系の仏像の後に現れた南北折衷様式の特色を有するとして、六二九年から六四五年のあいだとする興味深い研究がある（倉西裕子『救世観音像封印の謎』白水社）。『法華義疏』の場合と同様、著者やモデルが誰であれ、飛鳥時代に救世観音が作られたことは否定しがたい。ここでは述べる紙幅がないが、救世観音は法隆寺の大宝蔵院蔵の木造観音菩薩立像（百済観音）とともに飛鳥時代の観音信仰を伝えている。百済観音の名称は大正時代以降のもので、日本自生のクスノキ材の一木造りであり、この像も日本で造られたことが確定的である。

## 院内散歩 ㉓

～薬王院の展示物～

木版画『陽だまりの落柿舎』
作・井堂雅夫